

高分子夏季大学 東海支部のこと

石井義郎

本学会設立のころは東大二工にいたが、28年から名大工に移り工業有機化学講座に所属した。当時応用化学科では香川毓美先生が主に高分子物性の講座を担当されており、有機化学をもとにした重合の方面が欠けていたので部分的にはじめた。二工時代大学院学生であった山下雄也君を助教授と呼び、関口自然君（現群大工）と岩月章治君（現三重大工）を助手として、開環重合、ラジカル重合の研究が開始された。

高分子夏季大学には第5回箱根湯本（32年）から参加し第13回霧島まで途中1度休んだだけである。それぞれよい思い出があるが、第10回の札幌のあと野外教室A班に参加し、多田、眞弓、山形の諸氏と一台のバスで4日間の旅をした、快晴の日が多くとくに晴れ上がった摩周湖は美しく、20年後の今日でも懐かしい旅であった。このコースの参加費が18,800円であったことに今昔の感にたえない。

私が東海支部長を勤めさせていただいたのは36年から2年間であり、その頃の幹事の方々はいま大いに活躍しておられる。名大工に合成化学科が増設されてからは、石油化学の講座に移り、酒井鎮美君（現静大工）を助教授とし、

高分子から有機金属化学を含む合成化学に転身した。山下君は独立して高分子合成の講座を担当してもらい、現在りっぱな仕事をしておられる。名大時代の研究室の出身者は、東レUSAの依田直也副社長、日本合成ゴムの市川龍夫取締役をはじめ高分子関係の会社に多く、大学関係は上記のほか横田健二君（名工大）、岡田鉦彦君（名大農）、伊藤浩一君（豊橋技科大）たちがいる。

私自身は高分子の研究からは離れたが、内外の研究および業界の情勢は積極的に注目している。

（中部工業大学・教授）

白山の黒ゆり

大北熊一

高分子学会北陸支部は日本海に沿って福井、石川、富山、新潟と四県にまたがっている。各県の回り持ちで、少なくとも年に一回は



研究発表会が催されてきた。

研究室の院生や卒研生たちとともに学会に参加し、その後で小旅行に移るのが年中行事の一つで、能登半島の一周を皮切りに、あちこちと歩き回ったものである。

ところで、今から十数年前までは、毎日95本のタバコを煙にするヘビースモーカーであった。肺がんと喫煙との関係が話題になったところで、一念発起し、関西で開催される学会への出席を機会に禁煙に踏み切った。車中の10時間はともかく、会場では、いろいろな連続であった。

禁煙には成功したが、体重が増加し、腹も出ばって、靴のひもを結ぶのも苦しくなってきた。

昭和45年の夏に、支部の研究発表会が金沢で催されたころには、体重もピークに達した。学会が終了してから十数名の学生たちと立山を目指したが、一の越で完全に伸びた。しかし、50年の白山の時には、体重も70kgに調整しており、金沢大学の金子曾政教授（現学長）とその研究室のメンバーが歩調を合わせて下さったので、やっと登り切った。その日は天候もよく、頂上で迎えたご来光の美しさは今も忘れられない。

かつて、吉屋信子女史の「徳川の夫人たち」の連続ドラマをテレビで見たが、その一コマに、加賀藩から白山の黒ゆりを大奥に献上する場面があった。花瓶に活けたその花は、大奥を圧するほどにみごとであったが、白山で初めて見る黒ゆりはかれんで小さく、濃い紫の色が朝露にぬれていた。

（新潟大学名誉教授）

高分子夏季大学—— 尽きぬ思い出

大島敬治

目下身辺整理期に入っているの
で、続む方にはおもしろくもない
独りよがりて恐縮だが、高分子学
会と私のかかわり合いを整理して
みる。

高分子学会の前身の高分子化学
協会の機関誌に戦後間もなく報文
を出しているから、おそらく学会
には最初から入会しているはずで
ある。昭和 30 年代のなかばから
村橋俊介教授が開西支部長の時、
委員として下働きを始め、39 年か
らあとをついで支部長になった。

当時の支部委員には中島章夫、
松本恒隆、故箕浦有二、田所宏行
氏ら、その後高分子学会の中核と
して活躍された錚々たる俊英教授
が揃っておられ、そのお蔭で実に
愉しく活発に仕事ができ、またた
く間に年月がたって 10 年間も支
部長をやってしまった。その厚か
ましきはいまだに申訳ないと思っ
ている。

一番の思い出は夏季大学、山
中、京都、大山、宇奈月、城島高
原と 5 回運営委員長をやり、上記
の方々と企画を練ってハリキッて
働いた。大山の時の懇親会で自分
の趣味から、松本先生の買い集め
てこられた賞品を全部高分子にち
なんだ福引につくって大喝采を博
したこと、関東支部主催の蓼科高
原の時“高分子千一夜”というテ

ーマで、仁田 勇、金丸 競、星野
敏雄、呉 祐吉、桜田一郎、神原
周という大物揃いの座談会の司会
をやったことが特に印象深い。

大学関係者ではないから夏季大
学には自分の出番がある時しか出
席していないが、講義、座談会、合
わせて 15 回ほど出かけている。最
後の講演は一昨年の苗場だった。

その他、関西支部主催の毎春の
“高分子の基礎とその応用講座”
夏の神戸の研究発表会などもよく
引張り出された。光栄に感じている
のは、学会創立 20 周年の記念
講演をさせていただいたこと、第
1 回の功績賞を多くの皆さんと
もにいただいたことである。

(住友ベークライト(株)・顧問)

会員の投書で 実現した地域活動

篠原 功

学会と私とのかかわりあいは設
立以来である。私は会社から母校



に呼び戻され、無機に所属し泡沫
浮選の研究を行っていた。浮選
選鉱は常温分離で、この操作を化
学工業にも利用できるのではない
かと粉体のぬれや水溶性塩の浮選
を研究していたが、恩師小栗捨藏
教授の後継者で Wo. Ostwald の
門下生である武井助教授が帰校後
亡くなり、先生の御要望で私が先
生の下に研究転換したのが昭和 26
年、学会設立の年であった。呉
祐吉さんが学会設立の件で見たと
先生が話されたのを記憶してい
る。その関係でと思うが設立発起
人名簿に加えられた。先生の下で
和紙抄造用粘液の研究を行なっ
ていたが、先生が退官、亡くなられた
ので再度研究転換をし、オリゴマ
ーの研究から今日に至っている。

学会との結びつきは 10 年前関東
支部長の頃が最も印象が深い。前
支部長が岩倉教授で私が副支部長
のとき大学紛争が始まり、東大、早
稲田も例外ではなく、岩倉教授は
大忙がして、私も当時主任教授で
学生の矢面に立っていたのでお互
いに時間をカバーしながら関東支
部の運営をした。自慢ばなしのよ
うで恐縮だが、私の支部長時代、地
域活動と若手研究会が発足した。
始めたからは長続きを、と要望し
たが、一会員の投書から始めた地
域活動は現在も活発に行なわれて
おり、また若手の方も当初、中心的
に活動していた赤池敏宏、伴野丞
計ら諸氏ががりっぱに成長され活躍
しておられる。どちらもお役に立
ったことをうれしく感じている。

高分子学会のよさは設立当初か
ら幅広い分野を包含していたこと
である。私が関係していた静電気

研究部会が静電気学会創設の下地になったのである。学会のますますの発展を願います。

(早稲田大学理工学部応用化学科・教授)

母の死と第1回 高分子夏季大学

高島直一

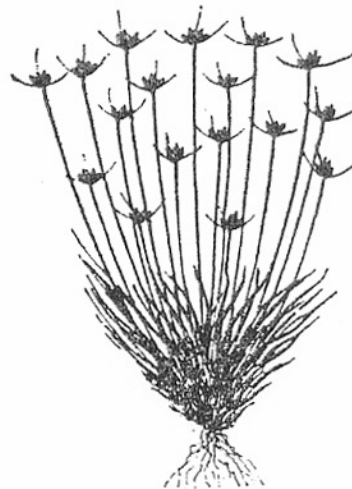
昭和28年の夏は雨の多い年であった。中央線は洪水で不通になり、急に切符を買いかえて、名古屋から東京一上野一軽井沢と回って、新鹿沢へたどりついたのは翌日の午過ぎであった。第一回高分子夏季大学の第一日目の講義はすでに始っていた。畳敷の大広間に寺子屋のような小机をおいて、皆あぐらをかいて聴講している。しかし、私の到着する前に私の家から「スグカエレ」という電報が着いていた。せめてものことと次のバスの出る時刻まで2時間ほど講義を聴いて、また来た道を引返した。その翌日母は逝った。夏季大学という、今もあの当時のひたむきな自分の姿を思い出し、母の追憶と重なるのである。

それから1,2年あとのことか、秋の高分子討論会が名古屋で開催された。その中にプラスチックの成形加工に関する討論の場を与えられるよう、当時の東海支部長K教授に申し入れたところ、ニベもなく却下された。成形加工の問題はまだ学会外のことであるから、やりたければ別の会場でやりな

いということであった、やむなく私の勤めていた名古屋市工研の講堂で、学会行事とは別に林田建世氏、服部剛氏らに来ていただいてプラスチックの溶融流動に関する講演、討論会を開催した。会のあと費用もないので、餡パンに番茶をすすりながら、熱っぽく話し合ったことは、何とか成形加工の技術を工学の場まで高めたいということであった。その後いつからか発表会のテーマに加えられたけれども、まだ日本では米・独に比して関心が薄いように思われる。次世代技術のための素材は華々しく喧伝されるけれど、成形加工なくしては実用化されないことを忘れてはなるまい。当時それを理解して下さっていたのは荒井溪吉氏であった。(油化シェルエポキシ(株)・取締役社長)

高分子夏季大学 初期の思い出

辻 和一郎



筆者は関西支部設立の昭和27年から38年まで仁田、村橋両支部長の下で副支部長をつとめたが、夏季大学は28年新鹿沢に始まり、翌年第2回を関西で世話して高野山で、また31年第4回を神戸摩耶山で開催し、次いで34年第7回は関西になった。当時参加者は300人程度であったが、そのころ関西ではその規模の涼しい場所が得難く、苦心の結果、飛騨の高山へ進出することになった。会場は市立第二中学校にしたが、登山最盛期のこととて宿舎が問題で、前年秋から現地交渉してようやく4~500人の宿泊を確保した。しかし夏の高山が人気を呼んだのか、申込みは500人を突破し、600人をこえる勢いになった。現地にふさわしい企画として京大士山岳会員安田武氏(武庫川女子大)の協力で、チョゴリザ初登頂の話、映画、世界で初めて合織を重用した装備の展示もあり人気を増したらしい。

うれしい悲鳴をあげたのは世話人で、遂に最後の切札を使わざるをえなくなった。普通の旅館には全く余地がないが、高山には旧赤線が転業した旅館があり、なるべく使いたくなかったのであるが万やむをえずその利用に踏み切った。「僕の宿屋は少し変わった建て方だよ」との参加者の声を耳にして冷汗をかいた。

もう一つ心配したのは懇親会場である。会場は適当な所がないので、本部を置いた日本旅館の2階とした。200人以上の重さに耐えるかを少し心配したが、主人が大丈夫と保証するので決行した。な

るべく静かにと念願したが、次第にメートルが上がって大盛況となり世話人の心配を増したが、さすがは飛驒の工の土地がただけにびくともせず、無事終了で胸なでおろしたのも、今思うと懐かしい思い出である。

(武庫川女子大学家政学部・教授、京都大学名誉教授)

称賛を博した Polymer Industry in Japan

藤井光雄

学会と私というと、ただ感謝の一言につきる。戦前からセルロースを中心とした高分子の研究に努力してきた私にとって、戦後続々と入手される情報の応接にいとまがなかった。学理と工業の急発展が併行した時代に、学会が創立され、わが国高分子科学の黄金時代への幕が切って落とされた。学会から提供される情報は、そのまま私の血となり、肉となった。

このような時代に、会誌や論文集の編集委員長や、その他の役職を命ぜられた私は、少しでも学会の発展にお役に立ちたいという念願以外なものもなかった。

この微力に対して、学会から各種の賞状や記念品を頂戴したことが走馬燈のように走る。なかでも1978年に高分子科学功績賞を受けたことや、叙位叙勲の榮に接したことは終生忘れえない。

思い出は多いが、なかでも、1966年にわが国で高分子化学国

際シンポジウムが開催されたときのことが忘れられない。学会行事の一つとして、わが国の実力を内外に紹介するため「Polymer Industry in Japan」という冊子を刊行することに決定した。そしてこの刊行委員長を命ぜられた私は、各委員の協力を得て、内容の検討、費用源の問題など、文字通り昼夜努力を傾注した。

約270ページ、全英文の大冊子を刊行し、称賛を博したことは忘れられない。学会創立30年を迎える今日、おそらく一部の人々の書棚の片隅におかれているにすぎないであろうが、今でも時折、このずしりと重い本を手にとって感

慨にふける次第である。

(慶応義塾大学名誉教授)

松下村塾思わせる 学会の雰囲気

古谷正之

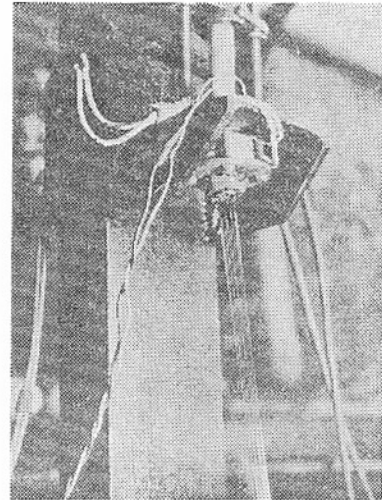
昭和24~5年ごろ銀座教文館ビルに仮事務所があり、杉田(元ダイセル)と宮本(後に独立)両氏がおられ、間もなく荒井さんが事務長格で加わられて、ポリマー屋のたまり場となった。そしていよいよわれわれの宿願であった学会

私の一枚

第1号溶融紡糸機

星野孝平

「私の一枚」は、高分子学会の前身の高分子化学協会の前の財団法人「日本合成繊維研究協会」時代の中から選ばれた。この協会は商工省の肝入りで昭和16年1月につくられ、東レも会社として出資し、種村研究部長が技術委員になられた。ナイロン試験工場は、滋賀工場の元人絹紡糸室で、昭和18年初から操業し、4月23日に上記研究協会の技術委員会一行に公開された。そこでこのローソク式紡糸機がうまくいっていたので、「溶融紡糸があんなにやさしいとは思わなかった」という感を



もられた方もあった。

この写真は、その前年に種村さんが辛島専務の許可を得て部下の杉山初太郎に撮らせたものである。この第1号機はその後ニクロム線加熱から熱媒加熱式に改造され、新重合体の試験紡糸に使われていたが、昨年か滋賀の「東レ記念館」に展示されている。

(東レ(株)・基礎研究所・顧問)

設立の準備が本格的に進められ、楽しい夢に胸をふくらました。日本の復興の支柱の一本を高分子でという熱意に燃えていた。

次の思い出は夏季大学で、第1回の信州を皮きりに毎年開催された。全国の同好の士が数日間起居をともしながら議論に花を咲かせて深更に及んだ。そして多くの師と友に知己を得ることができたのは幸せであった。

高分子学会の長所はきわめてリベラルな雰囲気にあると思う。これはよい伝統として今後も維持せねばなるまい。

また設立趣意書に強調されているように、化学者のみでなく、広く物理、電気、機械、建築、医学、農学などと異なる分野の専門家が直接参加され、対等な立場での協業による境界領域の問題解決に、既に多くの成功例を得ているので、これは今後も強化せねばなるまい。たったこの間まで「若手」の一人と思っていた私も、いつの間にか「老兵」になってしまった。私にとって高分子学会は何であったか？ 吉田松陰の松下村塾のようなものであったような気がする。30周年をお祝いすると同時に、21世紀を目ざしてますます発展されるよう祈る。

(旭電化工業(株)・顧問)

脳裏に浮かぶ 幾多のこと

南 治夫

私と学会との出会いは昭和26年の初夏にはじまる。親しくしていただいていた東京大学の雨宮綾夫先生から「高分子学会を設立するにあたって、機関誌の編集を手つだってくれないか」との申し出があり、はじめて荒井溪吉先生に紹介された。

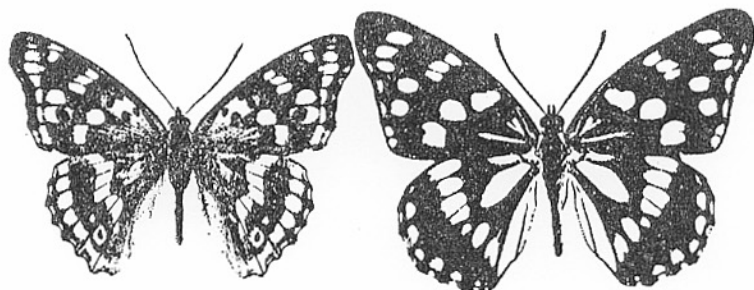
当時の学会の事務所は日本橋の織維会館の一隅にあり、とても編集業務をする場所もなく、印刷屋の机一つで学会誌「高分子」の第1巻第1号や論文集「高分子化学」の編集をはじめた。毎夜のように雨宮先生(初代編集委員長)と、ああでもないこうでもないと作業をしたことが昨日のように思い出される。そして、初代会長厚木勝基先生をはじめ、星野敏雄、桜田一郎、祖父江寛、神原周、岩倉義男の歴代会長の下で事務をとり懸命に取り組んでいるうちに、いつの間にか30年高分子学会と関係をもって今日までできてしまった。

したがって、“学会と私”という

テーマは、私のすべてが学会とのかかわりあい、依頼の紙数ではとても書きつくせないが、特に印象深く思い出されることは、1966年に、東京・京都でIUPACの高分子国際シンポジウムが開催され、事務局をさせていただいたことで、その3年前の1963年にパリで開かれたのを機会に会期中の一週間をパリに滞在しているいろいろ体験し、[その時のことは在パリの関口 煜先生のお宅で「国際高分子シンポジウムに参加して」という座談会(高分子, Vol. 12, No. 138, 704)にまとめた]それから2年あまり、桜田一郎組織委員長、大屋晋三大会委員長、原田珍重促進委員長、小寺明科学委員長のもとで推進し、盛会の裡に終始できたことは私にとって大きな思い出である。

もう一つは、1970年に待望の欧文誌「Polymer Journal」が発刊されたことである。出版するまでの論文公募、海外へのPR、編集作業、また国際誌として恥ずかしくないデザイン、紙質、活字スタイル等々細かいところまで委員会や専門の方と相談して作成したことが懐しく思いだされる。

私と学会とのかかわりあいには荒井溪吉先生なくしては語れない。先生は先見性の非常に優れた方で独特のキャラクターで政界、学界、財界を引っばっておられた。先生との20年間はいろいろとエピソードもあるが、学会運営については大きな構想をもっておられ、特に官学民の共同体制については高分子学会の前身である合成繊維研究協会、高分子化学協会



以来実行されており、日ごろ接している方も企業トップや政界の方が多かったことを記憶している。今、御存命であればどうなさるだろうかと思ふに、仕事の糧としている。

昭和 48 年の石油ショックを契機に、高分子学会に高分子同友会が、川崎京市（現日本合成ゴム（株）相談役）、神原 周、岩倉義男先生がたの御尽力により発足されたが、荒井溪吉先生の構想の一つが開花したとも思っている。

現在、その組織の仕事に携わっているのが、官学民の接点として、また、日本の化学工業の展開のため、事務局として少しでもお役にたてばと思っている。

こうして書きだしてみると、昭和 26 年の東京大学での創立総会以来今日まで幾多のことが脳裏に浮かんでくる。また、機会があれば折々の思い出を書いてみたいと思う。

（高分子同友会・常務幹事）

中小企業技術者の一層の努力を

森本佐一

1. 工業高校出身者のためのページを

現在の学会誌には通常、高校出身程度の技術者のためのページが、非常に少ない。しかも日本の産業を支えているのは、中小企業の努力が多い。中小企業の技術者は、大部分が高校出身者である。

その人たちのためのページを、現在の 20% ぐらい割いてほしい。かつて私が繊維学会のお世話をしていた頃、この方面にはかなり努力をしたが、

2. 昨今の貿易摩擦と、これからの技術

昨今の新聞に貿易摩擦の記事のない日はない。しかも日々エスカレートしている。今までの安くてよい物を作っておればよいのだ、との商品観が変わってきた。ある意味で価値感の大きな変化である。私は同一商品で、輸出先のシェアが 20% になると、輸出をやめざるをえないのではと、考える。次の輸出に対しては、その品質が 20% 以上変わっていないければならない、そのための技術者の育成が必要となってきたのが、昨今である。

3. 研究とは

研究とはいろいろの情報の組合せではないか。とするとますます勉強要領のよい勉強が必要である。私はかつて次のような式でそれを、まとめた。研究を成功させるには、

$(\text{本質を掴む能力})^3 \times (\text{情熱})^3 \times (\text{実験})^3 \times (\text{知識}) \times (\text{知識の整理力})^2 \times (\text{本人の素質})$



かつての頃とは異なり、広い知識が必要となっている昨今である。技術者にとって、むづかしい時代である。

4. 現在の不況

政府の言っているように簡単なものではない。中小企業の町に住んでいる私には実感として大変なことだと思う。世界中が不景気の時、日本だけが景気がよくなるだろうか。エネルギー、原材料のためかなりの輸出が必要な日本、技術者の努力が、しかも合目的な努力が、と思う昨今である。

（国際化学研究会・常務理事）

ソ連の印象— 昭和 42 年

山田正盛

1967 年 6 月、私は学会派遣のプラスチック応用開発調査団の一員として、ソ連に行った。ソ連は当時いわゆる鉄のカーテンの時代であった。私どもの一行はヘルシンキを経てレニングラード飛行場に着陸した。機を降りようとする直前に、腰にピストルをさげた強そうな役人が乗ってきて、私どもの旅券を取り上げていった。初めての外遊で旅券は命から 2 番目に大切だと聞かされていた私どもには、この扱いは大きな驚きであった。機を降りた私どもは殺風景な部屋に連れてゆかれ、意気あがらなかった。ところがここにいた若い女性は立上って“皆さんよくいらっしゃいました”と流暢な

日本語で話しかけてきた。私どもはまた驚いたが、それでも何となく救われたような感じもした。彼女はイントゥリストから派遣された通訳兼ガイドで、レニングラードにいる間つき合ったが、なかなか優秀なガイドであった。彼女の流暢な日本語は少女時代を函館ですごして覚えた由であるが、そういえば見たところ 30 歳くらいの彼女の話し方は少女の調子そのままであった。

モスクワでの通訳兼ガイド、イワン氏は年配の男性で日本語は下手だった。彼は非常な愛国者らしく、説明のはしばしにソ連の施政礼讃をつけ加えた。しかしこうしてソ連好い国を強調するだけではもの足りなくなったのか、しまいにはバスの中でソ連はいかに住みやすい、好い国であるかを、くりかえし私どもに説得する始末であった。こういう愛国者はソ連の共産党員ではないかと考えられるが、彼はちがうそうだから、その予備員くらいのところであろう。

(福井大学名誉教授)

初代会長誕生まで

渡辺貞良

高分子学会の発会式の通知と前後して、分厚い封書が速達便で到着した。見れば旧知の友成九十九氏からの親書である。何かと封を切ると、高分子学会の会長として厚木先生の御就任をお願いしているのだがどうしても御承諾が得ら

れず、万策尽きたので、先生の女婿である小生に説得方をぜひ頼みたいとの内容である。友成さんにはクラレ時代から一方ならぬ御厚誼をいただいている。したがって何事でもお引き受けすることになっているが、とにかくなかなかの大任である。勇を鼓して先生にお目にかかり、百方御承諾をお願いしたのであるが遂々御承諾には至らない。絶対に自分は受けないと結論が迫ってくる。やむなく友成さんには先生との話の詳細を記したお詫状を差上げた次第である。やがて発会式の当日となった。会場はたしか東大の法経第 25 番教室であったと記憶する。司会は荒井溪吉氏で既に微醺を帯びている。模造紙が一枚ずつ剥がされると、下に役員名が次々と現われ、拍手とともに承認されてゆく。しかしなかなか会長の名前は出てこない。会長は一体誰なのか？ やがて最後の一枚が剥がされた。会長厚木勝基(交渉中)と書いてある。荒井氏は会長は厚木勝基先生であるが目下交渉中、近く快諾の見込みであると説明し、ここに滞

りなく発会式は無事終了したのであった。小生の返事の内容が曲解されている心配がふくらんできた。早速友成さんに会ってみた。友成さんは君の手紙で厚木先生の御真意が明かとなった。君の努力には本当に心から感謝している。しかしこの件は最早引けないのである。もう一押しで御承引いただけると確信していると非常に楽観的である。その直後、住み馴れた東京を離れ、札幌に転じた。結局その後、先生が会長をお受けした様子を知ってほっとしたが、友成さんの粘りに感心するとともに、三顧の礼の故事を少しくほろ苦い感じで想起したものである。

北大に赴任して北海道支部のお手伝いをする事になり、昭和 42 年から退官の 47 年まで支部長を勤めさせていただいた。当初会長不在の本学会がよくここまで発展したものだと感心するとともに、厚木先生、友成さん、荒井さん、その他のなつかしい方々が既に亡くなられていて、改めて 30 年の歳月の重みを深くかみしめる次第である。

(北海道大学名誉教授)

学会に感謝する

畑 敏雄

私は高分子学会の創立や、その後の運営などにはほとんどお役に立っていません。それどころか、学会に大変お世話になり、そのな



かで楽しく過ごさせていただいたことに感謝しているものです。

高分子とのおつきあいは長かったと思います。今の高分子学会の前身のまた前身の合成繊維研究協会が、亡くなった荒井溪吉さんや桜田一郎先生のお骨折りでできたとき、東京工大にもその分室が作られて、私はそこを研究の根拠地にしていました。戦時中風船爆弾の球皮材料の水素透過実験をやっていて、爆発をおこして危うく失明しそうになったのも、そこでした。

私はいま接着屋のように言われていますが、その方面の最初の論文「剝離の力学」を書いたのは、学会の前身である高分子化学協会

の機関紙「高分子化学」(1947年)でした。しかし今の高分子学会が設立された1952年頃は、平和運動に夢中になりだしていて、それ以後10年ぐらい研究放棄の期間が続いて、学会とも御無沙汰していました。

金丸 鏡先生が創設された接着科学研究委員会(いまの接着と塗装研究会)を、故井上幸彦先生の急逝のあとお引受けして、10年間ほど委員長をしていたのが、唯一のお手伝いかもしれませんが、これも楽しみながらやってきたことです。その間に1965年には第2回高分子訪中団(団長神原 周先生)に加えていただいて中国に遊び、1971年には接着視察団の団

長としてアメリカ・ヨーロッパを遊びまわったこと、みんな高分子学会のおかげです。

そのうえ、学会には会員にも職員にも美女がいっぱいいて、事務局に行くのも年会や討論会に出るのも、そういう方々に会う楽しみがあるのです。「学会に感謝する」理由の一つです。

(東京工業大学・群馬大学名誉教授)